

別紙 4

報告番号	※ 第	号
主 論 文 の 要 旨		
論文題目	カースト・ジェンダー意識が女子教育に与える影響 —ネパール山間部の低カースト「ダリット」のエスノグラフィー—	
氏 名	ADHIKARI ARYAL Madhu Maya	
論 文 内 容 の 要 旨		
<p>本研究では、「カーストとジェンダー」の観点からネパールの教育をとらえ、女子教育参加のメカニズムにこれらの要因がどう関わっているのかを明らかにした。</p> <p>ネパールでは、カースト制度（差別的な身分制度）や家父長制度（男性優位社会）の影響が未だに根強く残っており、人々の中のカースト意識とジェンダー意識が複雑に絡み合い、社会習慣として固定化され続けている。カーストとジェンダーという二重のヒエラルキーにおいて下位に置かれているダリットの女子は、社会・家庭の中で不当な立場に置かれており、学校教育参加も困難な状況となっている。近年、ネパール政府や国際協力機関の取り組みによって、ダリット女子教育の問題は改善しつつあるように見えるが、実際には、統計などに表れない暗示的な問題が依然として残されている。本研究の目的は、女子の学校教育参加の問題を探り、社会・家庭や学校教育のプロセスの中で生み出される差別に注目し、その側面からダリット女子の教育参加をめぐる問題を明らかにすることである。本研究では、エスノグラフィックフィールドワークを行い、これまで注目されてこなかった、現場で実際に起きている問題点を明らかにした。</p> <p>本研究の目的を果たすために、以下の二つの点に注目し、考察を行った。</p> <p>一点目は、カースト意識とジェンダー意識の相対関係と女子教育への複合的な影響である。これまでの研究は、いずれもジェンダーとカースト意識の問題を個別に分析していた。それらは「ジェンダー平等」とダリットの教育参加を検討する点で非常に重要ではあったが、複雑なカースト意識とジェンダー意識の相互関係がどのようにダリット女子の学校教育参加に影響しているかという視点が十分ではなかった。本研究では、当該社会におけるカースト意識とジェンダー意識の問題を個別に論じるのではなく、カーストと女子という二つの属性の相互関係に着目し、現場で人々の実態を調査・分析することで特定の集団の個別具体性に配慮しつつ包括的な考察を試みた。</p> <p>二点目は、教育現場での目に見えない差別意識がダリット女子教育に与える影響である。ネパールの法律では差別的行為が禁止されており、ダリット解放運動も差別行為を糾弾したため、目に見える差別行為は減少してきた。その結果、差別は解消されたという印象を多くの研究者や人々が抱くようになった。しかし実際には差別は無くなっておらず、特に教育現場では顕在化しづら</p>		

い差別へと変化してきていると考えられる。本研究では、統計書類を用いた教育の実態の把握に加え、友人関係調査、座席調査を通じて、ダリット女子に対する暗示的な差別を客観的に分析し、それらがダリット女子教育参加に及ぼす影響を考察した。

以上の二点に注目しながら、本研究では4回に渡って、ネパールの西部地域ゴルカ郡 X 地区のダリットコミュニティとそのコミュニティにある A 小・中・高一貫学校で6カ月以上のエスノグラフィーフィールドワークに取り組んだ。フィールドワーク実施に際しては、調査対象者である保護者、学校の校長、試験管理の担当教師、学科の担任教師、学校の児童・生徒、彼らの親などに対して、本研究のテーマ、目的、内容、方法といった概要、及び収集したデータの利用範囲、管理方法、生徒の尊厳、プライバシー、人権の侵害を防ぐ対策などを十分に説明し、同意を得た上で調査を開始した。また、その調査内容は日常生活の観察、インフォーマルインタビュー、ライフストーリーとライフヒストリー、質問紙調査、生徒の日程表調査などの多岐にわたる方法を用いた。さらに、対象者と親密な関係を築くことで、非常に希少な情報までも得ることができ、有意義な結果を得ることができた。同時に、本調査を行った時期のネパールには10年間にわたるマオイスト紛争の影響が根強く残っており、治安の悪化や経済的危機などの問題が深刻化していた時期であった。マオイストの紛争は一応終結し、240年続いたゴルカ王朝の政体から「ネパール連邦民主共和国」へと政体が変わり、マオイストが政権を取るようになった。とはいえ、政権の移り変わりが激しく、世情は安定せず、政治経済は混迷した状況が続いていた。中でも、ダリットコミュニティや学校はその紛争の大きな影響を受けており、学校では紛争の影響で破壊活動及び略奪行為が発生し、人々の生活が危険に晒される状況が続いた。これらの影響から、ときに危険な状況や調査が困難な状況に陥ることもあったが、調査に必要な情報収集を十分に行うことができた。なお、全ての調査はネパール語で行い、論文は日本語で執筆した。

本調査時には以下の三点を具体的な調査課題として設定した。

一点目は、どういった属性の子どもが学校教育に参加できているか。すなわち、ヒエラルキーとしてのカーストおよびジェンダーの差異に注目し、学校教育参加の現状、特にダリット女子の教育の現状を明らかにした。

二点目は、ダリット女子の学校教育への参加を促すにはどのような変化が必要か。女子奨学金制度をはじめとした女子教育普及のための政府や国際協力機関の取り組みによって、ダリット女子の学校教育参加にどのような変化が生じているかを、対象者の語りを通して考察した。

三点目は、ネパールの社会文化や人々が持つ差別的意識・態度が女子教育参加にいかなる影響を及ぼしているか。学校内での学習プロセスの中で生じる見えない教育差別、この暗示的差別に対するダリットの親・女子の認識に注目した。そしてそれらの認識がダリット女子の教育参加に与える影響を考察し、その問題点を明らかにした。

これらの設定課題は本論文ではそれぞれ、一つ目は第一章と第二章に、二つ目は第三章、三つ目は第四章、第五章、第六章に対応している。本論文の前半である、第一章と第二章では、ネパ

ールの社会に根付いたカースト制度から見た教育の変遷を取り上げ、それが近代教育にどのような影響を与えているのかを考察した。また、ネパールにおける女子教育の現状、特に低位の状態に置かれていると考えられるダリット女子の位置づけを概観し、ダリット女子の学校教育参加を妨げる要因を、先行研究の検討を通して考察した。後半にあたる第三章から第六章では、ゴルカ郡で実施した現地調査から、考察を行った。まず、女子教育を改善する教育支援、特に奨学金制度の問題点を現地の人々の語りを通して明らかにした。次に、学校内における目に見えない暗示的な差別や、社会や親が女子に対して抱く否定的な価値観を分析し、ダリット女子の教育参加にどのような影響を与えているのかを観察・分析から考察した。

以上の調査・分析から、ネパールの女子教育の問題点について、以下の三点をあげる。

一点目は、社会や家庭が持つカーストとジェンダーをめぐる固定観念や規範に基づく差別意識の問題である。家庭の経済力や親の教育歴が娘の教育にマイナスの影響を与えていることは否めないが、社会や家庭に根強く残る差別意識こそが、ダリット女子教育を困難なものとし、学習達成度向上を阻害する主要な原因となっている。女子の労働は家庭への貢献であり、家庭生活に不可欠なものであるが、それは男性中心の家庭制度の中で家庭を守っていくために「当然」女がこなすべき仕事、役割と見なされ、価値が認められることはない。このような環境で育ってきた女子は自然と自分自身の価値を実際より低く見がちであり、自信や自尊心を持つことができない。こうした意識が内面化されたダリット女子が親となることで、ダリット女子に対する否定的な価値観や態度が再生産されてしまう。教育を受けたダリット女性は差別的な規範や観念から脱却した考えを持つようになったが、そうしたダリット女性はごく少数であり、まだ教育の重要性が一般に認識されているとは到底言えない。ダリット女子は、「女」や「ダリット」という低位の属性に対して与えられている差別的な規範や認識のために、教育参加が困難な状況に置かれているといえる。

二点目は、学校内の「暗示的な差別」がダリット女子に与える負のインパクトの問題である。学校教育では、カースト・ジェンダー差別意識を取り除いていくことが求められ、明示的な差別はほとんどなくなったが、実際には、文章や規律などには表れない、教師や生徒の態度に表れる「見えない差別」が未だに根強く残っている。学校内でのカーストやジェンダーによる差別役割分担、高カーストや男性優先の価値観やイデオロギーが子どもたちの学習プロセスの中で内面化されていく。教室の中で日常的に繰り返されるダリット女子に対する否定的なラベリングの表明などの差別構造がダリット女子の学習達成度に強い悪影響を与えている。特に、教師がダリット女子に対して差別的な言動を取ることは、学習意欲向上の土台となる教師・生徒間の良好な人間関係の構築を妨げるものであり、ダリット女子の学習意欲の減退につながっているものと考えられる。しかし、教師たちはダリット女子の学習達成度の低さを彼ら自身の怠惰や先天的な能力の低さ、家庭における教育の重要性の認識の低さに帰結させてしまっており、学校教育や教師の資質に原因があるとは考えていない。それは教員側が自身の差別的態度を意識していないというこ

とであり、ダリット女子に与えている負の影響を認識できていないという点でより一層深刻な問題であると言える。

三点目は、ダリット女子の教育普及を目指した包括的な支援の実施の問題である。本調査時には、教育支援制度がどの程度女子の学校教育参加に影響を与えているかを示す統計的データが保存されていなかったため、現地の人々の聞き取り調査などに重点を置いて考察を行った。その結果、女子奨学金受給者の生徒や親は何の奨学金をどのような目的で受け取っているのか知らない、あるいは学校から意図的に知らされていないことが明らかになった。女子奨学金は女子全員に支給されるわけではないし、支給されても、継続は保障されない。支給プロセスでは成績優秀な生徒が優先して支給されるが、家庭での労働過多などによって成績が伸び悩んでいるダリット女子はこれらの奨学金の対象者に選ばれない。奨学金支給の可否の決定には貧困や人間開発指標に基づく基準がないため、学校によっては奨学金支給資格基準が校長や教師の判断で決まる。その場合、奨学金支給のプロセスにおいて生徒の親の社会的・政治的地位が奨学金の支給者選定に影響を与えていると考えられる。こうした恣意的な支給基準では、実際に奨学金を必要とする対象者まで行き届かない場合も多い。また、最も支援の手が届かない「Hard Core Group」と言われるダリット女子に対する教育支援制度の改善を目指す議論も行われていない。また、社会文化的規範が内面化したダリットの親が奨学金の支給を受けたとしても、危険な通学路などの通学途中のリスク、娘が一人で外出することへの不安等をもってまで娘を学校教育に参加させようとは思わない。そうした意識を踏まえ、女子たちを取り巻く社会文化的環境を視野に入れた包括的な支援が必要である。このような従来の不透明な支援プロセスでは、二重のヒエラルキーに苦しんでいるダリット女子の教育参加推進に十分な効果を期待することはできない。

以上の3つの具体的な問題点を踏まえ、ネパールの女子教育参加問題の全体像を検討した。ジェンダー・カーストヒエラルキー意識を生み出した宗教的社会文化規範は、社会・家庭内に不当な役割意識を根付かせ、学校内にも暗示的な差別意識を生み出し学習プロセスに格差を生じさせることとなり、結果的にジェンダーとカーストの二重のヒエラルキーにおいて低位に置かれたダリット女子の教育参加を極めて困難なものとしていると考えられる。

近年、ダリット女子をとりまく教育問題に新たな傾向が確認されている。特に、深刻なものとして就学年齢のダリット女子の海外への出稼ぎ労働の増加という問題が挙げられる。ダリットの女子が学校を退学し、中東・湾岸諸国、マレーシア、韓国等に出稼ぎ労働者として海外に出ることが増加してきている。その結果、過酷な労働の強制や性的な搾取など人権侵害が発生している。これらの女子は帰国できたとしても、そうした仕打ちを受けたという悪いイメージを持たれ、学校や所属コミュニティから非難の目で見られることが多い。このようなトラウマを負い、居場所をなくしてしまった子どもたちが、不登校に陥ったり自殺したりするなどの問題も起きている。こういった海外に出る子どもの属性、家庭の傾向等の分析を行い、女子生徒の海外出稼ぎ労働増加の実態とその原因、女子教育との関係を把握することも、今後の課題のひとつである。